

コンサート気分で味わう名曲・名演奏

プログラム

昨年からの新型コロナウイルスの影響で、コンサートも普通に楽しめない状況が続き、音楽愛好家の皆様にとっては気分の晴れない毎日を過ごされていると思います。そこで今日は実際のコンサートプログラムの構成で、前半に序曲と協奏曲、後半に交響曲とアンコール曲を加え、コンサート気分を味わっていただきたいと思います。

歌劇や劇音楽の序曲ではなく演奏会用の序曲として作曲されたチャイコフスキーの「ロメオとジュリエット」はコンサートの前半でたびたび取り上げられる名曲です。今日は昨年亡くなったポーランド出身の名指揮者ヤン・クレンツ（1926～2020）46歳時の演奏でお聴きください（Nobuの秘蔵ライヴ音源紹介第13回参照）。モーツァルトのピアノ協奏曲第20番はこれまでになかったドラマティックな曲想や芸術的な完成度の高さなどによって全27曲のピアノ協奏曲の中でも特別な位置を占める傑作です。わが国を代表する名ピアニスト内田光子（1948～）は1970年のショパン・コンクールで第2位に入賞して以来活動の場を海外へ移して行きますが、1982年にロンドンで行ったモーツァルトのピアノ・ソナタ全曲演奏会の大成功で国際的な評価を決定づけました。その後ソナタや協奏曲の全曲録音によってモーツァルトは彼女の十八番となっています。今日はホルスト・シュタイン（1928～2008）指揮ベルリン・フィルという豪華な共演による名演奏でお楽しみください。巨匠カール・ベーム（1894～1981）は1975年にウィーン・フィルとブラームスの交響曲全集を完成させていますが、ライヴとなると第1番、第2番の多さに比べ、第3番、第4番は非常に少なく、1978年ザルツブルク音楽祭での第4番は貴重な録音です。全曲にみなぎる熱気と緊張感、ウィーン・フィルのふくよかな響きも魅力的で、この名曲の真価を十二分に伝える名演です。名指揮者ロリン・マゼール（1930～2014）は1993年から2002年まで、名門バイエルン放送交響楽団の首席指揮者を務め、1993年にはこのコンビでの初来日を果たしました。ブラームスの全交響曲を中心としたプログラムはどれも気力の充実した名演揃いで、今思い返すとマゼールが一番輝いていたのはこの頃ではなかったか、と思う程です。ハンガリー舞曲第1番は来日から3ヶ月後、キッシンゲン音楽祭で行われたコンサートのアンコール曲として演奏されました。短い曲ながら、ひとつのドラマを感じさせる名演です。ごゆっくりお楽しみください。（中川）

ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）： 幻想序曲「ロメオとジュリエット」

ヤン・クレンツ指揮フランクフルト放送交響楽団
（1973.1.26 ハッセン放送協会大ホールでのLive）

ヴォルフガング・アマテウス・モーツァルト（1756～1791）： ピアノ協奏曲第20番ニ短調k.466

内田光子（ピアノ）

ホルスト・シュタイン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（1995.6.20 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

*** 休憩 ***

ヨハネス・ブラームス（1833～1897）： 交響曲第4番ホ短調op.98

カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1978.8.23 サルツブルク祝祭大劇場でのLive）

ハンガリー舞曲第1番ト短調

ロリン・マゼール指揮バイエルン放送交響楽団
（1993.7.9 バートキッシンゲン、レーゲンテンバウでのLive）

曲目解説

チャイコフスキー：幻想序曲「ロメオとジュリエット」

チャイコフスキーが音楽家として自立し始めた頃、ロシア五人組（バラキレフ、ムソルグスキー、ボロディン、リムスキー＝コルサコフ、キュイ）のひとりで、その中心的存在だった友人のバラキレフの勧めで、シェイクスピア原作のロメオとジュリエットを書き上げたのは1869年29歳の時でした。高名なピアニストで、モスクワ音楽院の教授だったニコライ・ルビンシュテインはこの作品を高く評価し、翌1870年モスクワにてルビンシュテインの指揮で初演されますが、それほどの反響は得られませんでした。彼はすぐに手を加え第2稿を仕上げますが、これにも満足せず、さらに10年後の1880年に第3稿を完成させました。今日演奏されているのはこの版です。甘美な抒情性とドラマティックな劇性を巧みな管弦楽法で描写した名曲です。

モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番二短調K.466

神童ピアニストとして有名になりつつあったモーツァルトは、ウィーンでピアノ教師として生計をたてていましたが、26歳になると演奏家へと領域を拡げて行きました。最初は知人の音楽家達が主催する演奏会での共演、客演という形でしたが、次第に自分自身が主催する予約演奏会へと変わって行きました。自身のピアノによる自作のピアノ協奏曲はその見せ場となっていて、毎年新作のピアノ協奏曲を演奏していました。第20番は1785年2月11日の予約演奏会で演奏される予定でしたが、完成したのは前日の10日で、ぎりぎりです。予通り11日にモーツァルト自身のピアノで初演されました。これまでになかった悲劇的な緊張感やシニフィカントな響きは後に続くベートーヴェンの先駆けとなった作品と言っても良いかも知れません。モーツァルトの死後も演奏され続けた作品で、ベートーヴェンやブラームスがカデンツァを書いている事からも、この曲には心酔するほどの魅力が溢れているという事が分かります。モーツァルトの協奏曲を代表する傑作。

第1楽章 アレグロ 第2楽章 ロマンツェ 第3楽章 ロンド.アレグロ・アツサイ

ブラームス：交響曲第4番ホ短調作品98

ブラームスが最初に交響曲を書こうと思ったのは、1855年シューマンの「マンフレッド」序曲を聴いて感動してからでした。第1番はその年の夏に着手しますが、本格的に集中し始めたのは1874年頃からです。長い年月をかけて交響曲第1番を完成したのは1876年43歳の時でした。翌1877年には第2番を作曲しますが、次の第3番は6年後の1883年、続けて翌1884年第4番に着手し、1885年の夏52歳の時に完成されました。この頃のブラームスは毎年夏になると各地の避暑地に滞在して作曲するのが通例となっていました。第4番はウィーン西部のミュルツツォーシュラクで作曲され、1885年10月25日にマイニンゲンの宮廷劇場でブラームスの指揮で初演されました。この曲の大きな特徴としては、第2楽章の主題に古い教会音階のフリギア旋法を使用していたり、第4楽章にはバツハ時代によく使われたバツサカリヤ（変奏曲の一つで、短い主題を主として低声部で何度もくり返し、一回ごとにその旋律の上声部が変奏を続けていく）が用いられ、より古典的な形式で書かれていることです。曲全体は瞑想的な孤独感のようなものが覆いますが、悲劇的でありながらそれに立ち向かう力強さが共存しているかのように絡み合って豪快なコーダを迎えます。ブラームスの残した交響曲の最高傑作。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロツポ 第2楽章 アンダンテ・モデラート

第3楽章 アレグロ・ジヨコーソ

第4楽章 アレグロ・エネルジーコ・エ・パッションナート

ブラームス：ハンガリー舞曲第1番ト短調

ブラームスは若い頃からジプシー音楽に興味を持っていましたが、ハンガリーのヴァイオリニスト、エドゥアルド・レメニーと演奏旅行を行った折に、ハンガリーのジプシー音楽を紹介されてから病みつきになり、ピアノ四手連弾用の「ハンガリー舞曲集」を出版しました。1869年に第1集と第2集の10曲、1880年に第3集と第4集の11曲、合計21曲を作曲、これが好評だったためブラームスは第1番、第3番、第10番を管弦楽用に編曲しました。さらに第17番から第21番までをドヴォルザークが編曲、残りの曲もアルバート・パーロウ、アンドレアス・ハレーンが編曲し、全21曲の管弦楽版が完成しました。すべての基盤となっているのは、チャルダース舞の様式ですが、第1番は第5番や第6番と並んで最もよく知られた名曲です。コンサートではアンコールピースの定番として頻りに演奏されています。